《修士論文要旨》

日本の旧統治領における残存日本語の研究

—パラオを事例として—

桐　原　寛　尚*

本稿は、日本の旧統治領であった旧南洋群島のパラオの残存日本語の動詞と文法カテゴリーである可能表現形式と否定丁寧表現形式に関する研究である。

まず残存日本語話者が頻繁に使用する動詞を調べてみると、「行く」、「ある」、「来る」、「いる」などであった。これは日本国内で頻繁に使用されている動詞とほぼ同じであり、これらの動詞は日本語を話す上で必要不可欠な動詞であることがわかった。またパラオでは人や動物などを示す存在動詞は「いる」が一般的であるが、人によっては「ある」、「おる」で揺れている場合がある。ただ「ある」も「おる」も人に対しては両方使用できるが、猫や魚などの動物に対しては「ある」だけが使用されており、「おる」は使用されていない。

次に旧南洋群島の可能表現形式に関して、今回の現地調査のデータと先行研究のデータを用いてパラオの残存日本語の可能表現形式を通時的に考察することを試みた。その結果、パラオの可能表現形式の特徴は①助動詞「レル」と可能動詞では可能動詞を使用することの方が多く、年月が経っても可能動詞が高い使用率を維持していること、②助動詞「レル」がもっとも用いられやすいのは「行く」で「行かレル」となること、③「デキル」の使用率は近年上がってきており、その理由として「デキル」の汎用化が考えられることの３つであることがわかった。「デキル」の汎用化とは、渋谷（2002）が「日本語能力の低いと思われるインフォーマントには「魚デキナイ（＝漁ができない)」といった、「デキル」の意味を拡大して使用する」用法としているが、今回の現地調査では日本語能力の高いインフォーマントにも「デキル」の汎用化をみることができた。「デキル」の汎用化が起こる順序としては、まず最初に、五段動詞の可能形式が助動詞「レル」へ統合し、一段動詞の場合と同じように受身や尊敬と可能を同一形式で表現し、不規則な形式（可能動詞）を排除しようとすると動きから「スルコトガデキル」の多様が進み、「デキル」の汎用化が起こり日本語が「合理化」されると考えられている。

そして最後にパラオの否定丁寧表現形式を日本国内の否定丁寧表現形式の事例と比較することを試みた。その結果、日本国内の対談資料における「ナイデス」形の使用率の上昇は、これまで書きことばで許容されてこなかった「ナイデス」形が話しことばで許容され始めていることを示しており、パラオにおける「マセン」形と「ナイデス」形の比率は、現在の日本の話しことばにおける「マセン」形と「ナイデス」形の比率とほぼ同じであった。このためパラオでも「マセン」形から「ナイデス」形への変容があったのではないかと推測される。

そもそも日本国内で「マセン」形から「ナイデス」形へとシフトしていっている理由として考

平成25年度　*文学研究科国文学専攻

えられることは丁寧表現形式の「合理化」である。例えば「行きません」であれば、「行き（語幹）+ませ（丁寧）+ん（否定）」のように丁寧さを表す要素が否定を表す要素の前にあるが、「行かないです」は「行か（語幹）+ない（否定）+です（丁寧）」となり、丁寧さを表す要素が最後に現れる。つまり「～マセン」、「～マシタ」のように、丁寧表現形式を活用させる必要がなく、普通形に「（ン）デス」を加えるだけで簡単に丁寧表現形式を作りだすことができる。このように簡単な形式で丁寧表現形式を作り出そうとする「合理化」の力が働いているため、「ナイデス」形が用いられていると考えられる。

以上、パラオにおける残存日本語の動詞と可能表現形式、否定丁寧表現形式についてまとめてきたが、特に文法カテゴリーの可能表現形式、否定丁寧表現形式で共通してみられたことは日本語の「合理化」である。この「合理化」のメカニズムは実に興味深いもので、残存日本語地域だけでなく、日本国内でも既に起きている現象もあった。今後も現在進行中の日本語の「合理化」を追いかけていくとともに、残存日本語研究から予想しうる未来の日本語の「合理化」を発見できるようにさらに研究に取り組みたい。